慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カール・ディールの資本理論に就いて
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.2 (1925. 2) ,p.279(127)- 306(154)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250201-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

局限せられて宗派各部の狹き偏執を生せしめたるの短所はあれ、是みな隨用者の惡德のいたすところであつて何らその施與者を責むべき根據を持たない。

佛教が彼らに與へた關係も同じである。佛陀に面接したるところに、彼らは自らの生活哲學を確認し、經濟生活の目標を覺るにいたり、堂々たる陣容を整へて思ふざま活動することが出來たのである。かうした兩者の關係は佛陀の死後、益々濃厚となり、阿育王時代の隆盛なる佛教に於ては塔婆(Thūpa)聖地の巡禮　宣教師の派遣佛教大會の執行のすべてに兩者の表裏作用を見るべく、大乘(Mahāyāna)運動の如きも在家的氣分、商人勢力の著しき反映を見ることが出來るのである。西域西藏支那に流傳せる佛教、更に入竺求法の跡を見るに是又彼此の交易の兆なきを得ない。法顯以下の支那入竺僧の紀行錄が常に產物に注意し交易を逸せざるもの、又所以なきものではない。朝鮮日本に普及せる佛教、更に入唐求法の英傑の往來、內地佛教の地方的分布、足利五山の天龍寺船の如き、一として兩者の關係史ならざるはない。

宗教と經濟、信仰と營利、佛教と商業、比丘と商人、乞食と行賈、かうした一見するところ、水火の如き兩極端に位置してゐるやうに見えるものも、時間と空間といふ二つの殼子のふりやうによつては、忽ち互ひに綿々分離しがたき因緣を結ぶものである。自分はかうした偶然的な必然を偏へに興味深く考へてゐる者である。

（大正十四年一月十四日）

カール・ディールの資本理論に就いて

金原賢之助

一

從來多數學者の認めて以て生產の要素と爲せしものは、通例勞働、土地及び資本の三者である。而して資本の生產上占むる地位に關して、嘗ては之を過重視せし論者もあつたけれども、當今に於いてはその此上に有する地位は實に第二義的のものであつて、前二者と全く同一視す可らざるものなることは、一般に承認せらるゝ所なるが如くである。然るに、「然らば資本とは何ぞや」の問題に至つては、之に對する解答は區々として歸一する所を知らざる有樣である。洵に『資本』なるものは、吾人が更めて茲に贅言を弄するまでもなく、經濟學上に於いて最も紛糾せる概念の一となれるものであつて、吾々斯學研究者の興味を唆る一個の問題である。而して本稿は、此間に在つて獨乙經濟學界に於ける一方の權威者たるカール・ディール教授が此問題に對して果して如何なる見解を持せるかを、觀察するを目的とするものである。

從來行はれし資本學說を觀るに、之を分つて二種に大別することが出來る。一は自然的　純經濟的資本觀であり、他は歷史的法律的資本觀である。前者は、通例經濟學に關する著書に於いて先づ第一に(主として生產理論に於いて)與へらるゝ資本の觀念である。例へば生活必需品を獲得する爲に徒手で努力する人を描寫する場合には、先づ『クルウソオの經濟』を述べるのが如何なる著書に於いても例となつてゐるが、其如何なる書物に於いても、かのクルウソオに其

難破船から取出した若干の器具とか衣服とかの類を附與して置くのを忘れないのである。勿論クルウソオは自己の勞働の手段と未開拓ではあるが豐饒なる土壤の寶庫とを持つて居るけれども、唯それのみでは足らないものがあるのである。而も之を缺けるに於いては彼は何事をも爲し得なかつたのである。此必要缺く可らざるもの――即ち器具の類――は自然的資本觀に於ける資本であつたのである。實際人間の手なるものは、何等かの補助手段を用ひなければ、たゞ僅かに自然が人間に與へて呉れる野生の果實其他少數の物資を獲得し得るに過ぎない。多くの財貨は人間の勞働を直接適用することに依つては獲られるものではない、間接的方法に依つてこそ收得し得られるのである。例へば、人間が先づ漁網或は弓矢を作るならば、此等の器具なくしては捕獲し得ざる魚獸をも捕ふることが出來る、或は又幾何かの勞働を先づ鋤犂の製作に費すならば、豐饒なる收穫の得られるが如き播種を爲すことが出來る。總て斯の如き場合に、人間は、其欲望を滿足せしめんが爲に間接的の或は迂回的の方法を採るのである。即ち人間は先づ最初に道具とか或は機械とかを作り、然る後此等の要具をば財貨の生産に利用するのである。而して文明の進むに從つて各人は現在の小利よりも漸く未來の大益に着目するに至り、殆んどあらゆる生産は益々迂回的手續に依つて行はれ、其結果中間的生産物は愈々精良に且つ缺く可らざるものとなるに至つたのである。斯の如き中間的生産物換言すれば『生産されたる生産要具』こそは所謂資本なるものである。

以上は自然的資本觀の極く大要であるが、若し資本が前述の如き生産要具を指すものであるならば、釜〻資本は殆んど人間と共に存在し、人間と共に消滅するものと云はなければならぬ。蓋し太古蒙昧の時代と雖も直接的の生産方法は寧ろ例外的の事實と觀るべきであつて、未開野蠻の人々も川より水を掬するに當つて素手を以てせしことは少なかるべく、多く石とか皮とかの器具を用ひたであらう。又漁獵民族に在つても釣竿、網器、丸木船、弓矢、棍棒等を有してゐたのである。繼つて吾人々類の將來を考察するも、道具とか或は機械とか云ふが如き生産要具を利用することなくして吾人の欲望を滿足せしめ得る時代は、全く夢想だに爲し難き所である。してみれば、生産要具としての資本は人間と共に存在するものと言つても差支へない筈である。換言すれば自然的資本觀は絶體的範疇としての資本を觀察してゐるものである。

然らば吾人日常の用語に於いて資本とは斯る生産要具を意味してゐるか。例へば米穀を食するに當つて直接之を用ひず、釜其他の道具を用いて之を米飯となし以て食したりとせんに、斯る場合に釜其他の道具を資本と言ふか。決して然らずと答へなければなるまい。してみれば資本には絶體的範疇としての意義とは相異れる別の意義があるものと言はなければならない。是れ即ち資本の歴史的法律的觀察なるもの〻起る所以である。此種觀察に依れば、資本とは前述の如き生産要具そのものを指すのではない。所有者に所有者自身の勞働とは關係なく收入を齎らす所の總ての財貨、詳言すれば或人の所有動産中、其人に取つて營利の手段として所得收得の爲に用ひられ得べき部分を意味するのである。併しながら此定義は或る經濟的社會的狀態を前提としてゐることは明かである。特に利子を徴收して財貨を貸與することの可能であると云ふ事實、或は生計の爲に喜んで備はれる無産

者の勞働を獲る爲に財貨を用ふることが出來ると云ふ事實を前提として居るのである。

既に右の前提よりして知り得らるゝが如くに、此種資本は太古未開の時代には存在し得ないものであつて、明かに生産資料私有の確立及びそれより生ずる賃銀並に利子の收得を承認する法律制度の存在を必要とするものである。隨つて私有財産權そのものと同じ程古いものであり、私有財産權の廢止と共に消滅に歸すべきものである。言ひ換れば、法律的資本觀は歴史的範疇としての資本を觀察してゐるものである。

要するに絶體的範疇としての資本は、それが勞働の要具となつて生産する力即ち生産力(productivity)を其特徴となせるに對して、歴史的範疇としての資本は、他人の勞働を支配する力即ち收利力(rentability)を其特徴となしてゐるのであつて、實に『資本』には全く相異れる二種の觀念が許容せられて居るのである。而して從來資本に關して說を爲すの論者甚だ多しとは言へ、其何れも大體に於て、或は絶體的範疇としての資本のみを觀察するか、或は歴史的範疇としてのそれのみを認めて前者を排するか、將た或は其兩者をも認容せんとするか、三者何れかに屬するものと觀ることが出來よう。然らばカール・ディールは之に對して如何なる見解を持せるか、是先づ吾人の觀察せんとする所である。

今ディールの所說を窺ふに、明かに彼は資本を以て歴史的範疇に屬するものとなすの論者である。故に彼は絶體的範疇としての資本は之を資本と言はず、寧ろ之を呼ぶに傳統的名稱たる『生産されたる生産手段』(produzierten Productionsmittel)を以てするの便宜なるを信ずるものである。即ち曰く「資本は可動的營利財産である。吾人は資本を以て財産の一部分と認むるものであるけれども、併し所謂生産されたる生産手段とは之を區別せんと欲するものである。この生産されたる生産手段は純技術的自然的範疇を現示するものである。それは專ら生産に於ける一定の技術的補助手段であり、而して人間に依りて生産されたものであると云ふ點よりして自然的の生産手段即ち土地と區別せらるゝのである。」(Karl Diehl, Theoretische Nationalökonomie, Zweiter Band, SS. 269-270) 彼の觀念する資本が既に斯の如きものである以上、彼の資本も亦「私有財産の法律的範疇に屬するものであつて、たゞ私有財産なる法律制度の存する限り」現存するものなのである。

右の如く彼の資本は可動的の營利財産であつて、財産の一部分を指稱するものである。而して財産とは彼の所說に從へば、或人の自由處分の下に在る財の總計であるが、又此財産は二種に類別せらるゝ。一は消費財産であり、他は營利財産である。

消費財産とは、或人の支配權の下に在る財の中消費の用に供せらるゝもの、總てを包括せるものである。これに屬するものは人間の消費する生活資料であつて、衣服、住居、家具等の如き是である。

之に反して營利財産は、或人の財産の中直接の使用又は消費の用に供せられざる部分、換言すれば何等かの方法に依り新しき財の作出或は收得の爲に利用せらるゝ部分である。此營利財産は復た二部分に分割せらるゝ、一方は土地財産であり、他方は可動的營利財産である。而して彼によれば前者は營利財産の一部分ではあるけれども資本ではなく、其後者のみを以て資本と名付くることは前述の如くである。(S. 270)

ディールの認むるが如き歴史的範疇としての資本の觀念は、既に早く Adam Smith の所説に於いて之を見出すことが出來る。即ち Smith は或人の所有する財の蓄積（ストック）全體を二の部分に分つ。一は其所有者の直接消費に供用せらるゝ部分、他は彼に收入を與ふる部分である。而して Smith は此後の部分に對してのみ資本なる名稱を附與してゐる。(Smith, Wealth of Nations, ed. by E. Cannan, p. 261)以上の範圍に於いては、Smith はディールの所謂營利財産を資本と認めてゐるのであるが、併し Smith の定義は以上の範圍に止まつて居らなかつた。即ち彼は更に國民的資本と個人的資本の區別を論述する。今彼の所論を概述すれば、社會の總ストックも亦二の部分に類別し得らるゝ、一は直接消費の用に供せらるゝ部分であり、他は所有者に所得又は利潤を齎らす部分である。而して其後者が所謂國民資本とも云ふべきものであつて、之亦個人資本の場合と同じく、所有主を變更せずして所得又は利潤を生ずる彼の所謂固定資本と、所有主を變更することによつてのみ所得を生ずる流動資本とに分類されてゐる。即ち Smith は個人の場合に於けると同樣に一社會の場合に於いても資本と非資本との區別を所得を生ずると否とに求めてゐる。而も彼は必ずしも此立場を一貫せしめてゐない。或場合には技術的生産の有無を以て其標準と爲して居るのである。例へば住宅は他人に賃貸して收入を生ずると云ふ點より觀れば個人資本とはなり得るけれども、併し國民資本とはなり得ない、蓋し社會にとつては何等の所得を齎らさぬからであると述べてゐる。之に反して工場、機械、原料品等の如きは之を國民資本に屬せしめてゐる、蓋し此等の財の蓄積は直接消費の用に供せらるゝ部分とは異り、常に國民に新しき財を齎らすものであるからである。茲に於つて Smith は生産財としての資本を眺めてゐることゝなるのである。(Smith, op. cit., pp. 263-8)要するに Smith の所説は多少の矛盾と立場の混亂とを包擁してゐるとは言へ、個人的立場に於いては、個人的所有者自身に所得を齎らす所の資本即ち營利資本を觀察し、社會的立場に於いては一社會又は一國に所得を齎らす所の生産要具としての資本即ち生産資本を考究してゐるものと言ふことが出來よう。果して然らば Smith に於いては尙ほディールの以て資本と認めざる絶對的範疇としての資本も亦容認せられてゐるものと言はなければならぬ。

然るに Smith 以後の經濟學者は主として生産要具としての資本に重きを置けるの觀があつた。其一二を擧ぐれば、David Ricardo の如きは「資本とは一國の富の中生産に用ひらるゝ部分であつて、食物、衣服、道具、原料品、機械等勞働に效果を與ふるが爲に必要なるものである」(Ppinciples of Political Economy and Taxation, ed. by Gonner, p. 72)と言ひ、J. S. Mill も亦其 Principles of Political Economy に於いて「生産的作業が原始的産業の蕪雜且つ空虛なる狀態以上に行はれ得んが爲には、過去の勞働の生産物の蓄積が必要缺く可らざる要件である。此勞働生産物の蓄積をば資本と稱するのである」(p. 54)と述べ、又 Kleinwächter は資本の特徵は生産的勞働の苦痛を輕減するに在る、勿論此特徵はあらゆる生産手段に附屬してゐるものではないけれども、生産手段の一種類即ち生産の道具には從屬してゐるものである。故に論理的に言へば資本の概念は生産の道具に限定されなければならぬ (Grundlagen und Ziele sog, wissenschaftlichen Sozialismus, 1885, S. 184, Böhm-

Bawerk, Positive Theorie des Kapitales, S. 29.）と論じてゐる。其他或は Fawcett の如き、或は Conrad の如き、此傾向の論者は一々枚擧するの却つて困難を覺ゆる有樣である。

併しながら、Smith 以後資本に關する學說は簇生して甲論乙駁殆んどたゞ混亂と紛糾を加ふるに過ぎざりし間に在つても、資本には斯の如き相異れる二方面あることは漸次確認せらるゝに至つた。就中 Smith の營利資本と生產資本の區別を其眞の位置に導き來り從來の錯綜紛糾を一掃するの端を開きし功績は、ディールも認むるが如くに Rodbertus に與へられなければならぬ。即ち彼は資本當體(Kapital an sich) 或は純經濟的範疇としての資本は論理的且つ永續的概念である。蓋し吾人の思考し得らるゝ如何なる經濟制度に於いても又あらゆる經濟的法律制度の下に在つても、吾人は自然と勞働のみを要する生產方法と、生產されたる生產手段をも補助として用ふる生產方法とを區別し得るからである。併しながら、此最後の一般經濟的資本概念即ち生產手段としての資本は、社會經濟的資本概念と區別されなければならぬ。即ち此場合に問題となるものは社會組織である。言ひ換へれば此種資本即ち個人的資本は生產手段私有の認めらるゝ、社會に存在し、之を所有する個人にとつて所得の源泉となるものである。全く此種資本は永久不滅のものではなく、歷史的に滅失すべき範疇であると說いてゐる。(Diehl, op. cit., S. 267) 斯くして彼は資本當體と個人的資本とを峻別し、Smith 說に一段の明確を加ふるに至つたけれども、併し未だ個人的資本のみを資本と認め、資本當體を資本概念中より排除するの擧には出でなつたかのである。

而して更に Karl Knies, Eigen von Böhm-Bawerk, Adolf Wagner 等諸大家の業績も亦、右の如き二物同稱の事實を顯示するに與つて多大の力ありしものである。就中 Wagner の所說は Rodbertus のそれと緊密なる關係を有する所であつて、彼の用ふる經濟的技術的資本概念と歷史的法律的資本概念とは Rodbertus より得たるものである。姑く Wagner に從へば、經濟的技術的意義に於ける資本に在つては、人間を外界の自然と對立せしめ、而して斯くして生ずる經濟的諸關係が考究せらるゝ。之に反して歷史的法律的意義に於ける資本は、或人の所有動產中其人に取つて營利の手段として所得(賃子、利子）獲得の爲に供用せられ得る部分、又從つて斯る目的の爲に其人の所有し獲得するものを謂ふのである。簡約して謂へば賃子基本（Rentenfonds）である。故に斯る「資本所有の爲には……生產手段の私有並に之より生ずる賃子及び利子獲得の承認せらるゝ法律制度を前提とするものである。斯る基礎の上に立てる交易制度に於ては、經濟的範疇としての即ち生產手段の蓄積としての資本は主として個人的所有の形體を採るのである。」(A. Wagner, Grundlegung I. 3. Aufl., S. 316-7; Diehl, op. cit. S. 267-8) 斯の如き區別はディールも亦之を甚だ重要なるものと一應は肯定する。併し彼は必ずしも之に左袒する者ではない。否な寧ろ之を以てたゞ資本概念の混亂を導くに過ぎぬと主張するのである。蓋し右の如き所論の關係する所は「事實上全く相異れる二個の現象である。即ち一方に於いては生產されたる生產手段の純技術的範疇に關係し、他方に於いては一定種類の私有財產に關係してゐる。故に此區別は極めて重要なるものではあるけれども、併しそれだけに用語の缺乏に惱んでゐるものと言はなければならぬ。吾人が『資本』

と云ふ同一名辭を以て全く不同の二現象を表示せんか、たゞ混亂と曖昧に導かれざるを得ぬ」(Diehl, op. cit., S. 268)と論結するのである。

茲に於いて、百尺竿頭一歩を進めて資本概念に顯著なる貢献を爲せしものは、Lassalle, Marx等の社會主義者である。Karl Marxは生産の技術的補助手段を資本概念中より分離するに極めて峻嚴なる者である。彼の觀る所を以てすれば、資本はたゞ經濟發達の一定段階に出現する社會的現象に過ぎぬのである。洵に彼の眼に映ずる所のものは、たゞ歴史的範疇としての資本あるのみである。ディールも亦屢々引用せらるゝMarxの所言を"Lohnarbeit und Kapital"より借り來つて、歴史的範疇としての資本のみを認容するの資料と爲さんとするものゝ如くである。即ちMarxは言ふ「資本はあらゆる種類の原料品、勞働要具並に生活資料より成立してゐるが、此等のものは更に新たな原料品、新たな勞働要具並に新たな生活資料を生産する爲に使用せらるゝ。此等の資本構成部分の總ては、勞働の造つたものであり、勞働の生産物であり、蓄積された勞働である。新たな生産の手段として役立つ所の蓄積された勞働が資本である。

斯樣に經濟學者は言ふ。

ニグローの奴隷とは何であるか？　黑色人種に屬する人間であると。先きに擧げた經濟學者の説明とは、此説明位の値打のものである。

ニグローはニグローである。一定の關係に於いてそれが始めて奴隷となるのである。紡績機械は木棉を紡ぐ機械である。たゞ一定の關係に於いてのみそれが資本となるのである。この關係を切り離しては、機械が少しも資本とならないこと、猶ほ金がそれ自體貨幣ではなく砂糖がそれ自體砂糖價格でないのと擇ぶ所がない。……

……資本も亦一の社會的生産關係である。それはブルジョア的生産關係即ちブルジョア社會の生産關係である。資本を構成する部分たる生活資料、勞働要具、原料品は、與へられた社會的條件の下に於き、一定の社會的關係の中で、産出され蓄積されたものではないか。此等のものは與へられた社會的條件の下に於て一定の社會的關係の中で、新たな生産の爲に利用されるものではないか。而して正にこの一定の社會的性質が新たな生産に役立つ生産物を資本と爲すのではないか」云々と。

實にマルクスにとつて、資本は餘剰價値獲得の手段であり資本主義的生産方法の存する所にのみ現存するものなのである。Rudolf Stammler は、全然 Marx の用語を承認しては居らないけれども、大體に於いて右の解釋に同意を與へてゐる。ディールも亦既掲の所論に徴すれば、略々 Marx, Stammler 等と同一の立場を採つてゐるものと思はれる。即ち彼は「Rodbertus や Wagner が個人的資本と名付けたるものゝみを、資本と指稱するを以て正當である」と考へてゐるのである。斯の如くディールは資本概念を所謂個人的資本のみに限つてゐるけれども、而も尙ほ從來經濟學者が一般に説明する所の生産資本に一瞥をだに與へずして去ることは出來なかつた。この事は既に述べた彼の所論からも明かであるが、又彼は、Jacoby が資本概念を個人的營利資本のみに適用し、經濟的技術的意義に於ける所謂資本を Produktionsprodukt と名付けんとするに對して、其名稱は不適當である、寧ろ舊來の慣例たる Produzierten Produktionsmittel なる名稱を與へた方が一層好都合であると主張してゐるのである。是れ蓋し從來の如く一

名稱を以て相異れる二物を同稱するの弊を避けんとするの用意に出でたものであらうが、それと同時に彼としては後に述ぶるが如き理由の存するものがあるのである。

以上聊か枝葉に亘つて諸家の資本概念を點檢したが、之によつてカール・ディールの資本々質論の占むる地位を大體明かにするを得たこと、思ふ。故に筆を進めて次の問題に移らう。

三

次に觀察せんとするは資本形成の問題である。これ亦幾多論客の論議の中心となつた問題であるが、凡そこれに關する學說は二種に大別することが出來よう。

其第一は、資本形成の原因を貯蓄或は節欲に求めんとする學說である。これは最も古い學說であつて、夙に Adam Smith も資本の形成を節儉に歸してゐる。勿論彼は生產的の勞働を看過してはゐないが、併し之を第二位に置いてゐる。即ち曰く「資本增殖の直接的原因は節儉であつて、勤勉ではない。勿論勤勉は節儉が蓄積する所の目的物を供給はする。けれども勤勉の獲得する所は如何に大であらうとも、若し節儉にして之を節約し貯蓄しなかつたならば、資本は決して增大しないであらう」(Smith, op. cit, p. 320)と。此見解を採る論者は甚だ多く、例へば J. S. Mill の如きは「あらゆる資本は貯蓄の結果である、換言すれば將來の福祉の爲に現在の消費を節することの結果であるから、資本の增殖は二の條件——即ち貯蓄を爲し得る源たる基本の高と貯蓄を剩載する人間の心的傾向の强さ——に依存せざるを得ぬ」(Mill, op. cit. p. 163)と言ひ、又 Wilhelm Roscher も資本は主として節約によつて形成さるゝ旨(Grundlagen der Nationalökonomie, S. 132)を述べてゐる。

第二は前說に反對して起つた說であつて、生產を以て資本形成の原因となすものである。今 Karl Rodbertus に依れば「經濟學者は A. Smith 以來一般に、資本は節儉と蒐集によつてのみ形成する旨を主張してゐるが、併し此說は孤立經濟に於いては事實でない。……孤立經濟に於ける最初の資本の發生を可能ならしむるものは勞働生產力の增加であつて、節儉ではない」(Das Kapital, 1913, SS. 170-72)と陳べ、又「孤立經濟の資本と同じく、國民的資本も亦勞働によつてのみ形成し增殖するのであつて、節儉によるのではない」(op. cit. SS. 189-190) と主張してゐる。或は Lassalle の如き、或は Marx の如き、皆此種の主張を表明せるものである。

近世經濟學者は此社會主義者の見解に對して幾分の同情を有するが如き觀がある。就中最も明確に其傾向を示すものは Charles Gide である。Gide は明かに「資本は生產物であるから他の如何なる生產物とも同樣に、あらゆる生產の本源的二要素たる勞働と自然とのみより形成され得るのである。試みに道具、機械、工作品、各種の原料品等吾人の想ひ浮べ得る資本のあらゆる種類を通觀するに、一として他に源を有し得るものがないのである。」而して「單純たる消極的行爲即ち單純なる節欲が何物かを生產し得る所以を想像するは不可能事である」(Political Economy, pp. 124-5)となして、貯蓄說の一顧にも値せざる所以を滔々と論述してゐる。又 Philippovich の如きも、營利資本の眞正の增加は新生產資本の形成を必要とし、而して新生產資本の形成は過去の生產に依るの他途なき旨を認め、貯蓄はそのまゝにては資本形成の因となることなし(Allgemeine Volkswirtschaftslehre 氣賀勘重氏解說二七〇、二七四頁)と陳べてゐる。

ディールの所說も亦此等諸家の所論と相去る遠きものではない。即ち彼も資本形成の本源は之を勞働に求めてゐるのである。曰く「資本の形成が何等かの勞働或は行爲に負はなければならぬことは、資本概念にとつて本質的のことである」と。併し茲に注意を要することは、彼は貯蓄或は節欲を全然無視するものでないと云ふことである。「資本の形成は常に勞働に歸するものである。併し資本の本質から起る他の一事がある、それは、資本の形成には勞働が必要であるのみならず、亦當該財貨を直接の享樂に供用せざることも必要であると云ふことである。勞働の結果を直接の享樂消費に投ずる者は決して資本を獲ることが出來ぬ。たゞ先づ勞働を行ひ而して其勞働の結果を直接に消耗せず、生產即ち新たな財貨の獲得に供用する場合にのみ、資本は形成さるゝを得るのである。」(op. cit. S. 270)

是に由つて觀ればディールは節欲を第二義的に認めてゐるものと言ふ可きである。

四

更に吾人は資本概念中より土地を區分するの論據に就いて一瞥を加へようと思ふ。先きに述べたやうに、ディールは營利財產を二分して一を土地財產となし他を資本財產となしてゐるが、等しく營利に供用せらるゝ財產でありながら何故斯る分類を爲すの必要があるか。彼は通例經濟學者が與ふると同じく、土地財產は資本財產と異り人間の生產したものでないのみならず、不可動的であり且つ不可增的であると云ふ諸點に論據を置いてゐる。即ち土地財產は斯の如く資本財產と本質的に相違せる特色を有してゐるから。此兩概念を區別するは適當であると認めてゐるのである。加ふるに彼は、土地そのものより得らるゝ所得は之を地代と謂ひ、資本より生ずる所得は之を利子と稱する以上、此等兩種の財產は相異れる所得の源泉となると云ふ理由を以て、斯る區別を必要と是認する別の論據と爲してゐる。

而してディールに依れば、資本と土地の經濟上に於ける差異を根本的に表明せしは Rodbertus の功績であるとなし「土地財產は、資本及び勞働が特別の性質を有すると同樣に、亦特殊の性質を具有するものである。」「資本の性質は可動性其ものゝであるに反して、土地財產は國民的土地の一部分である。從つて土地は資本の正反對のものであり、而して不可動性そのものゝである。資本はあらゆる形體に變形し得らるゝけれども、土地財產は決して他の形體に變形し得られない、依然として常に土地である」、「かるが故に土地は資本ではない、蓋し土地は他種類の資本と異り、生產に供用せらるゝに當り、其價値と共に生產物の價値中に入り込むものではないからである」云々等の所說を引用してゐる。

斯の如き論據の當否は姑く措き、要するに土地が資本の一部であるか否かは各人の採る資本の意義に由つて分るゝものと言はなければならぬ。Wagner, Schäffle, Brentano, Fischer 或は Clark の如きが土地をも資本と認むるは皆其資本の定義の然らしむる所であり、ディールが之を除外するは彼が資本を以て可動的營利財產と定義する所から出づる當然の歸結である。故にディールも亦、「土地財產も資本財產も等しく消費財產に對立してゐると云ふ理由から此解釋（土地と資本とを區別する說）に對して疑念を懷く者は、先づ資本を生產財と同列に置き、而してこの生產財を可動資本と不動資本に分つと云ふ分類法を採用することが出來る」(op. cit. S. 271)と認めてゐる。

併し茲に不問に附す可らざる一事がある。元來土地は天然の賜物である。この事は全く疑ひない。けれども今日吾人に依つて利用せらるゝ土地は決して純然たる天然物でないことも亦疑ひないことである。純然たる天然物であつた土地は幾百年幾千年の間に、人間によつて或は變形せられ或は施肥せられ以て夥しき人爲の加つたものとなつてゐる。故に今日に於いては土地は純然たる人造物でないと同樣に亦純然たる天然物でもない。而して從來學者の說明に依れば先づこの人爲の加つた土地を觀念上に於いて分解し、天與の部分を土地となし人爲の部分を資本と認むるが常であるが如くである。所謂生產的地上設備を資本の一種類と認むるなどは即ち是である。然るに堤防、墻壁、灌漑、運河等に至つては工場、家屋等以上に不可動的である。資本を以て可動的營利財產と爲すディールは此等に對して如何なる判決を下さんとするか、其解釋を彼自身から聞き得ざるは甚だ遺憾の次第である。

以上の說明からして、ディールは土地を資本概念中に包括せしめないことだけは全く明白であるけれども、特に資本の形式を擧げて說明して居らないから問題となり得るやうな特殊の場合、例へば土地會社が利潤を得て賣却する目的を以て所有する土地の如きは何と觀るかは之を知ることが出來ぬ。彼は資本の形式に就いては唯次の如く述べてゐる。「資本に關する余の定義から生ずることはあらゆる種類の財は資本となり得ると云ふことである。完成せる使用財並に機械、原料品、工場建物及び此種の生產された生產手段は之に屬する。」「完成せる使用財例へば衣服、裝身具、自轉車等も亦、利潤を得て販賣する目的を有する商人の所有に在る場合には資本となり得る、何となれば此等のものは其商人にとつて商品資本又は商人資本であるからである」(S. 271)と。斯る見地のみから言へば、商人が自轉車を賣却して利潤を獲ると、土地を賣買して利潤を收むると何等撰ぶ所はない筈であるけれども、土地は元來が不可動的且不可增的であるから、假令人爲の加へられた土地であつても、彼の資本の定義から推論すれば之を資本の範疇から除外するものと觀る可きであらう。

五

ディールが取扱つてゐる次の問題は、貨幣が資本であるか否かの問題である。而して彼は先づ貨幣を其主たる職分から觀察して資本に算ふ可きものではないと論ずる。即ち「貨幣は交換資料であるが、併し生產手段でもないし又營利手段でもない。其處で貨幣は、其最も重要なる職分に於いては所得の獲得に資する所がないからして、資本と反對の地位に立つべきものである。故に吾人が個々の賣買に際して支拂資料として利用せんとする貨幣は、百姓が寶物として貯藏せんが爲にトランクに入れて所持せる貨幣が資本でないと同樣に、亦資本でないのである。」(S. 271)

併しこれは貨幣を其主たる職分から觀察した場合の事であつて、彼は之だけで議論を止める譯には行かぬ、蓋し貨幣が資本たるか否かは、單に其職分からのみ觀るべきことではなく、其が營利財產となるか否かによつて決しなければならぬからである。茲に於いて貨幣は營利財產となり得るか否かを考慮しなければならぬが、これは云ふまでもなく可能の事柄である。例へば貨幣を貸金として他人に貸附くる場合の如く其利用せらるゝ貨幣は最早其貨幣本來の職分を

離れて所得を收むる手段となるのであるから、斯る場合の貨幣が營利財產の一部であることは明白である。元來「貨幣は、何人も喜んで受納するあらゆる財貨を代表するものであるが故に、交易經濟の貨幣經濟時代に於いては貸借物件として用ひらるゝもの、中最も重要なる形式である。而して余が何人かに一年の後に返還を受くる約束の下に貸附くる貨幣は、其借主によつて資本主義的に利用され得る。即借主は其貨幣金額を機械、原料品或は其他の生產手段を購入し之によつて生產を遂行する爲に、利用することが出來る。此場合には其貨幣は生產信用に役立つのである」。即ち斯る場合には貨幣は貸主にとつても借主にとつても所得獲得の手段となる。又「消費の目的の爲に、換言すれば消費信用として他人に貸出さるゝ貨幣」も貸主にとつては所得を齎らす源泉である。故に「貨幣は其主要分に於いては資本ではなくて交換並に支拂の資料であるとは言へ、而も資本ともなり得るもので、又之を逆に言へば資本は貨幣の形體を採つて現はるゝことも出來るのである。」否なたゞに資本となり得ると云ふのみでなく、「貨幣が單に交換の資料として用ひられないで何等かの方法により資本主義的の目的を達する爲に利用せらるゝ場合には、常に資本となるものである。」茲に於いて吾人は「所得を齎らす有價證券を有價證券資本と言ふと同じく、之を貨幣資本と名付くることが出來るのである」（S. 272）と彼は論結して居る。

右の說明は大體に於いて何人も承認する所であらうと思はれるけれども、併し貨幣が資本であるか否かを問題にする場合には主たる職分より觀たる貨幣を引合に出すのは聊か蛇足の感がないでもない。勿論所謂生產資本を云々する場合ならば其必要もあらうけれども、所謂營利資本のみを認容する彼に於いては特に論ずるまでもないことで、たゞ貨幣が營利財產となるか何うかを論證すれば十分であらう。蓋し吾々が、機械や原料品などが（營利）資本であるか否かを考慮する場合に、紡績機械は木棉を紡ぐのが其主たる職分である、衣服は人體を保護するのが其主要職分であると云ふが如き點から一々之を考察しないと同樣である。恐らく彼に於いては貨幣が一種特別の財貨であると云ふ點より特に數十言を費したのであらう。又彼は貨幣が資本に屬するの一例證として、貴金屬商が裝身具を製作する爲に用ふる貨幣は其貴金屬商の資本の一部であると述べてゐるが、此場合の貨幣は既に貨幣として存するのではなく、原料品として彼の資本の一部を構成してゐるのではあるまいか。

そは兎に角として、この貨幣と資本との區別は Geldmarkt（通例金融市場なる譯語が與へられるけれども、ディールの定義によればこの譯語は不適當なるが如し）と Kapitalmarkt（資本市場）との區別と密接なる關係を有してゐるのである。ディールに依れば「Geldmarkt とは貨幣が短期投資物として貸出さるゝ市場、Kapitalmarkt とは之に反して長期的に貸出さるゝ貨幣金額に對する市場と言ふのが、一般に普及せる解釋であるが、斯る說明は人を迷はすものである。兩者ともそれは Kapitalmarkt のことで、一方は貨幣形體に於ける短期投資の市場であり、他方は其長期投資の市場である。」故に「吾人は Geldmarkt に就いてはたゞ貨幣が貨幣として取扱はるゝ所、換言すれば鑄貨、紙幣等が、交易等の目的に充當せらるゝ貨幣として賣買せらるゝ場所と言ふ可きである」（S. 292）と解してゐ

る。

六

ディールは更に其論旨を進めて特色ある二三の資本本質論に批判の筆を及ぼしてゐる。其先づ第一に擧げてゐるのは、屢々經濟學者に依つて表明せられた所の資本の本質は貨幣形體を以て算定せらるゝに在りとの說である。此說は彼の觀る所を以てすれば、Carl Menger に依つて代表せらるゝものである。即ち Menger は、實社會に於いて資本と云へば常に貨幣金額を想起することになつてゐるが、此解釋は經濟學に於いても受入れらるべきものであると考へ、次の如く資本を說明してゐる。「資本の眞概念は營利經濟の財產を意味してゐる、而して其財產は、其貨幣價値が吾人の經濟的計算の對象である限り、技術的性質そのものであるかも知れない。……一般生活に於て資本なる語によつて理解せらるゝ所は、實際營利經濟に充當せらるゝ貨幣額、換言すれば營利經濟に充當せらるゝあらゆる他種類の財產の表示せる貨幣額である。（C. Menger, Zur Theorie des Kapitals. Conrad Jahrbücher, 17. Bd., Jena, 1888, S. 40）van der Borght も亦、資本概念を貨幣並に貨幣價値ある物件及び權利即ち貨幣資本に限らんとしてゐる。（Ein Vorschlag zur Lehre von den Produktionsfaktoren Natur und Kapital. Conrad Jahrbücher, 26. Bd., 1903）斯る見解は Liefmann の近著 Grundsätze der Volkswirtschaftslehre I. Bd. にも見ゆる所であつて、「資本とは、貨幣收益確定の手段としての、貨幣を以てする費用財の評價である、或は又貨幣收益確定の手段としての、費用財の貨幣的計算の形式と云ふことも出來る」云々と。（S. 567）

ディールは此等諸學者の主張を吟味し、斯の如く貨幣形體を過重視する資本の定義は誤れるものであると論斷してゐる。而して「假令實際の用語は資本概念を貨幣と結付けてゐるとしても、而も科學は此日常用語と共にすべきではない。資本は明かに營利財產である、而して資本は多くの場合に貨幣形體を採つて現はれ又之によつて計算せられるけれども、貨幣形體は資本の本質にとつては從屬的のものに過ぎない」と彼は觀てゐるのである。從つて彼に於いては、「貨幣形體の背後に存する實體價値こそ資本概念にとつて本質的のものなることを認むる」ことが必要であり、又資本と貨幣を混同するの說の如きは「マーカンティリズム的解釋への退步」とさへ映ずるのである。（S. 273-4）

茲に於いて吾人は、論者が先きに所謂生產資本を拒否して營利資本のみを承認し、以て日常用語への接近を示したにも拘らず、決して日常用語をそのまゝ活用せんとする者ではない事を明にするを得たのである。

ディールが批判せんとする第二の學說は、亞米利加の經濟學者 J. B. Clark の創唱に係る資本と資本財の峻別に關するものである。Clark は諸學者が採つて以て資本と爲す機械、原料品、工場等の如きは、資本そのものではなく、此等の具體物の表はす價値の總稱が資本であると主張するのである。Clark 自身の言を借りれば、「現に貨幣に表はし得れども貨幣其ものに具體化されざる生產的富の永續的元本」が資本であつて之を true capital と名付け、之に對して其具體物そのものを capital-goods（資本財）と稱するのである。而して資本の特色は永續的、可動的なるに在り、資本財の特色は可滅的、不動的なるに存するのである。斯く解すればディールが以て資本中より除外した土地の如きも資本財の

二種となり、それの表はす價値は資本の構成部分となるのである。

資本と資本財を峻別する以上の如き說は、ディールの所見によれば全く「曖昧に基く區別」である。度々前述せしが如くに、ディールの資本は私有營利財産の一部分であつて、全く一定の財そのものである。換言すれば資本は常に具體的形體を採るものである。故に資本を抽象的概念として觀察する Clark の說はディールの到底讀意を表する能はざる所に屬するのである。故にディールは曰く「世人が資本と言へば直ちに Clark の所謂『眞の資本』を云々するのは、一種の擬制である。然らば何故に資本は、資本の實體を形成する個々の具體物とは別の或るものから成立しなければならぬか。……Clark の區別は多くの點に於いて前に觀察せし Menger の解釋即ち資本を貨幣金額と密接なる關係に持ち來らすの說と類を同じうするものである。……Clark が資本を以て、可滅的事物の一連續に永久的に投入せられし貨幣額として解釋するならば、斯る解釋は、余が既に Menger の資本の定義に加へたると同一の疑念を高むるものである」と。(S. 274)

勿論ディールも Clark の資本學說が、資本概念と貨幣概念とを密接に相結付けんとする諸家の解釋よりも、遙かに傑出せることは之を認めて居るが、併し既に資本を以て具體的事物そのものと解してゐるディールより觀れば、貨幣にて表はさるゝ資本財の價値を以て資本と認むる Clark 說は、往時の資本概念への退歩と見ゆるのである。蓋し古代、中世に於いては資本は利子を生ずる貨幣の高即ち貸附元金額と解せられてゐたからである。

既にディールは、資本の本質は具體的概念なるに存し、實業界に於いて用ひらるゝ抽象的意義は一の擬制であると認むる以上、Clark 說に對して、右述の如き批評を與ふるは當然の事に屬する。吾人も亦大體に於いてディール說に左袒せんとするものであるが、併し彼が Clark の資本概念を以て往時の資本觀念への退歩と認むる點には全然同意することが出來ない。吾人は Clark の資本解釋と古代中世の資本觀念とは全く異れるものと考へると同時に、其資本と資本財の峻別は、吾人必ずしも之を採らないとは言へ、又一の卓拔なる觀察方法であると信ずるのである。

第三は、Clark の『資本抽象概念說』とは更に別種の、人間の知識、技能、或は國家の如きものを以て資本と認むる說に對する批評である。例へば Adam Smith は社會の固定資本を構成するものゝ一として、社會の住民又は成員の習得せし知識技能を擧げてゐる。而して之が習得に要する費用は恰も其人の身體に固定され、其身體に實現されてゐる所の一の資本として觀るべきものであると言つてゐる。J. B. Say, Friedrich List, W. Roscher 等の諸學者も亦斯る見解を表明せる者であつて、List は人間の道德的肉體的の力を das geistige Kapital と呼んでゐる。更に Roscher に至つては、勞働者が科學的研究に依つて得たる高度の熟練や、又勞働者が長き試練によつて獲たる强き確信などを非人格的資本となせる外に、如何なる國民に在つても其最も重要なる人格的資本は恐らく國家其ものであると述べてゐる。

併しディールは此等の諸說を以て總て擬制に基礎を置けるものと認め而して斯る擬制を基礎とせる概念の形成は吾人の科學より全く消滅し去ることを切に希望してゐる。(S. 275) 實際世間の日常會話に於いては知識、技能などを資本

又は元手と稱することがあり、收入を得るの源泉となることは明かであるが、此等のものは決して茲に所謂營利財産の構成部分ではなく、又此等のものを活用して得る收入は利子ではなくて勞銀の部類に屬すべきものであるから、此等のものを資本より除外するは正當と言はなければならない。

又時には人間そのものを資本と言ふ場合があるが、之に對してディールは奴隷に關してのみ此用語は意義を有するのである、蓋し奴隷制度に於いては人間が單なる商品として賣買され、個人の營利財産の一部であるから、之を資本に數ふることが出來る。併しながら奴隷制度の徹廢された社會狀態に於いては、人間を資本と指稱するのは前記の理由から不可能の事であると述べてゐる。（S. 275）

七

最後にディールは資本の種類と題して（一）個人資本と社會資本（二）個人資本と國民資本（三）固定資本と流動資本（四）不變資本と可變資本の四種を擧げてゐるが、その總てを認めてゐるのでないことは言ふ迄もない。即ち第一の種類は之を拒否する。元來此區制は Böhm-Bawerk の唱ふ所であつて、社會資本なるものは、將來の生産に供用せらるゝ生産物の總計を意味し所謂生産資本である。故にディールが、一般に營利資本と稱せらるゝ個人資本は之を承認するが社會資本を否認するのは、蓋し當然の歸結である。

第二の種類は或意義に於いてのみ承認せらるゝ、先づ其個人資本に就いては問題はないが國民資本に關しては三種の用法がある。即ち（イ）國民資本が前項の最後に述べしが如き、國民の長所例へば勇氣、國民的信用、國民的勢力等の意義に用ひらるゝ場合。（ロ）國民資本が一國民内に現存する個人資本の總額の意義に用ひらるゝ場合。（ハ）個人の所有に屬する資本の總計と云ふ意味に於いてゞはなく、國家の所有に係る資本の總計と云ふ意味に用ひられた國民資本。以上三種の用法は中（イ）の意義は勿論之を承認しない、蓋しこれは擬制に基く資本概念であるからである。（ロ）は一國民内に於ける營利財産の總計を知る爲の計算的用法であるが、ディールは特に其用法の可、不可を明かにしてゐない。たゞ斯る計算は非常なる難事であると言つてゐる所より推察すれば、好んで斯る區別を採用しようとはしないのであらう。（ハ）は國家に屬する鐵道等の如き營利財産の總計を意味するのであるが、彼は「此意味に於いては國民資本の概念は形成せらるゝ」と言ひ、此區別を認めてゐるが如くである。併し吾人の觀る所を以てすれば、此種の資本は國民資本ではなく、個人資本に對する國家資本と言ふべきである。

第三の種類に關しても讃否を明示してはゐないけれども、彼の採用する所の種類と言つて差支へないであらう。而して其意義は、營利財産を生産に供用するに當つて數生産過程の間持續さるゝ部分を固定資本と言ひ、一生産過程に消耗さるゝものを流動資本と爲してゐる。

第四の可變資本、不變資本の區別に至つては、彼の承認する種類なるか否か全然未知數である、蓋し此區別は Marx の使用するものであり、其價値並餘剰價値の學說に至大の關係あるものなるが故に、Marx の價値說を論ずる場合に取扱ふ旨を述べてゐるからである。たゞ流動資本を說明するに際して、企業家が勞働者の勞銀支拂の爲に前以て割當なければならぬ勞銀額は流動資本に屬すると說ける點より推して、ディールは第四の區別を敢て否認しないとしても、

固定資本と流動資本の區別を以て滿足せんとするものではあるまいか。

八

以上吾人は、カール・ディールの資本理論を其各項に亘り、諸學者の見解と對照しつゝ紹介した。今之を通觀するに、彼は從來多數經濟學者の主張し來れる資本の二重性即ち生產資本と營利資本の別を全然否認し、以て營利資本のみを容認したる外、特に新說を以て目すべき異數の點は彼の所說に見出し得ざるが如くである。敢て平凡と言へばそれまでゝあるが、併しそれだけに比較的無難の說と云ふことが出來よう。去りながら吾人の管見を以てすれば、ディールの資本理論の特色は、其個々の論旨並に論據に存するのではない。寧ろ彼の全學說の組立方殊に生產理論の體系（彼の分配理論は未だ將來の問題に屬する）に存するものと思ふ。然らば彼の資本理論は其生產理論の體系に對して如何なる意義を有するか。思ふに從來營利資本のみを資本と認むるの論者は、技術的生產の要素を擧ぐるに當つて、勞働等の一要素に歸せんとするの風があつた。或論者は營利資本のみを眼中に置くの結果、生產上に於ける所謂生產資本の作用を無視し、生產の要素は勞働のみである、蓋し所謂資本は結局自然に人力の加へられた結果であつてみれば歸する所は自然と勞働である。而して既に自然は天與の賜物なれば殘る生產要素は勞働あるのみであるからである、と云ふが如き見解を表明した。然るにディールは資本を所謂營利資本に限定しながら、尙ほ且つ技術的生產に三要素を認めてゐるのである。然らば彼の三要素とは何であるか。既說の如く、彼は一般に生產要素の一と看做さるゝ資本即ち生產資本を資本と呼ばず之に生產されたる生產手段なる名辭を與へてゐる。而して之を其一に加へて、勞働、自然並に生產されたる生產手段を三要素と爲してゐるのである。即ち彼は先づ生產を技術的と社會的の兩方面に分ち、而して此技術的生產を可能ならしむる爲には常に二個の力が共働しなければならぬ。其一は一定の自然力であり、他はこの自然力を活用する人力である。而して原始的な生產に於いては唯自然力と勞働力の二要素のみが協同し、直接享樂財を產出するのであるが、通例人間の勞働は先づ第一に生產の補助手段即ち道具、器具の作出に向けられる。この生產の補助手段を生產されたる生產手段と名付け、之が第三の生產要素となるものであると述べて居る。（S. 39-40）勿論其際、彼は勞働と自然とを以て生產の本源的要素を爲し、生產されたる生產手段は第二義的の地位に置いてゐる。而して更に彼は、「社會的意義に於ける生產要素とは何であるか、換言すれば何が國民經濟的生產過程を進行せしむる力であるかと問はるれば、其解答は何人が前記生產要素に對する支配權を有するかと云ふことに懸つてゐる」（S. 39）と述べ、社會的生產方法を全く異れる二形式に分割してゐる。即ち一は個人主義的生產方法であり、他は社會主義的生產方法である。前者に於いては生產手段に對する支配權が各個人に與へられ、後者に於てはこの支配權が全社會に委ねられる。彼の所謂資本は社會的生產方法の一方の場合に其姿を現はすのである。

斯くして、從來の學者は其認むる生產三要素中の一を資本と名付けたるが爲に所得の源泉としての資本と同稱するの混雜に陷りしにも拘らず、ディールは之を『生產されたる生產手段』と呼稱することによつて、一方に於いては資本なる一名辭を以て相異れる二物を同稱するの混亂を

脱すると共に、他方に於いては依然として技術的生産の三要素を主張するを得たのである。之を以て彼の資本理論に關する最も特色ある點と認むべく、又斯の如き見解は十分吾人の注目に値する所であると信ずる。（完）

阿部秀助先生の學究的生涯

高木壽一

大正十四年一月三日、午前十時二十分を以て阿部秀助教授は其聖い生涯を終られた。

先生は明治九年七月、九州福岡市須崎町土手町に出生せられ、長じて明治二十五年福岡高等小學校を卒業せられたる後、故郷を去つて山口に到り二十九年山口中學校、三十三年山口高等學校を卒業せらるるや、笈を負ふて東上し東京帝國大學文科大學史學科に入學せらる。此東都遊學の間脚氣に惱まされて一年の休學を餘儀なくされ明治三十六年七月同史學科を卒業せられた。先生は卒業以前の三十六年五月既に『内田博士の「日本近世史」を讀む』（史學雜誌）を發表せられた。續いて左の二篇の研究論文を公表された。

明治卅六年十一月　德川家康の商政と「メルカンチリズム」との關係を論じて彼が通商奬勵の動機に及ぶ（史學雜誌）

同　卅七年一月　伊達政宗海外派遣使の目的に對する吾人の疑問（史學雜誌）

文科大學史學科卒業後直ちに明治義會中學に奉職し歴史、地理を講ぜられ、翌三十八年には暫く讀賣新聞に入社せられた。恰も此頃は先生の苦闘時代であつたと後に自ら人に語られたことがある。三十八年四月よりは法政大學に講義をせらるることゝなつた。當時先生は法學士河上肇氏と學交あり、河上學士譯「新史觀」に寄せた序文の中に、先生の歴史觀の一班を示されて居る。明治三十八年七月三十日、召集令を受け直ちに小倉に急行し、八月戰地滿洲の野に出征された。軍務は後方輜重の任なれども幾度か前線に往復せられて辛苦を積まれた。三十九年二月歸還、直ちに以前の如く法政大學の講壇に立たれた。

然るに明治四十年、慶應義塾に於て地理學、歴史學を講ずべき人材を求むるや、先生は當時學交を訂することの密なりし福田德三教授の賞讃措かざる辭ありて、義塾に入り大學豫科に於て地理、歴史を講ぜられ又暫くは普通部に於ても地理を講ぜられたるやに傳へ聞く。

爾來今日に到るまで慶應義塾の教授として愈々益々其學蹟を積まれたのである。今先生の著作論文を左に列擧せん。

明治四十年十月　綜合經濟地理

明治四十一年　日本地理講義（上）

一　月　世界經濟上に於ける門戸開放主義（國民經濟雜誌）

二　月　本邦古代史（慶應義塾學報）

三　月　現代の史風（史學雜誌）

四　月　世界經濟上に於ける門戸開放主義（國民經濟雜誌）

八　月　海洋の研究（上）（慶應義塾學報）

九　月　古代史研究の方法に就きて（歴史地理）

十　月　海洋の研究（下）（慶應義塾學報）

明治四十二年

一　月　人文史上に於ける都市（歴史地理）

十七世紀に於ける日米の關係（上）（慶應義塾學報）

二　月　十七世紀に於ける日米の關係（下）（慶應義塾學報）

五　月　日本基督教史の研究（信長、秀吉、家康の基督教徒に對する態度）（三田學會雜誌）

八　月　新著紹介ドーソン男、蒙古史　田中萃一郎譯（三田學會雜誌）

九　月　上總介忠輝（一）（三田學會雜誌）